

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第915号 平成27年4月16日

チャレンジテスト

今年実施された高等学校の入学試験（学力検査）において、北海道教育委員会が実施しているチャレンジテストを参考にした問題が初めて出題され、話題となっています。

チャレンジテストは、小中学生の学力向上を目指して、2009年度（平成21年度）から道教委が独自に実施しているものですが、その中身を見るとあくまでも基礎基本の定着に主眼が置かれている事が良く分かります。

また、このチャレンジテストはネットで配信されていますので、子ども達は家庭学習等でも取り組む事が可能となっています。

北海道教育委員会では、各学校がこのテストを活用する事で、全道・管内との比較も容易に行う事が出来、その集計結果を活用して、子どものつまずきに応じたきめ細かな指導や放課後等の補足的な学習サポートの充実等にも生かすことが出来るとし、各学校に対して積極的な取り組みを求めています。

今年の高等学校の入学試験においては、問題の一部でこのチャレンジテストが活用された訳ですが、この点について高校教育課では、学習指導要領に基づく日々の学びを見るという点で小中学校と目的が重なりと説明していますし、進学舎の浦昌代表も「良問を解く事は学力を上げる一つの方法。受験生にとっても、何を勉強したら良いか分かる」と好意的に評価しています（3月16日付北海道新聞から）。

その一方で、3月16日付の北海道新聞では、学校現場からは「テスト漬けが進む」との慎重論がある事や、道央の中学校の国語教諭（50歳）が「入試に出るといわれれば、繰り返しやらざるを得なくなるが、例えば小説を味わうように読むような時間が削がれていく」と話している、といった批判的な意見も載せています。

この国語の教諭は、普段の授業とチャレンジテストを切り離して考えているのかも知れません。しかし、「チャレンジテストのための対策」といった発想を持つ事自体が誤りで、本来、普段の授業内容が子ども達にしっかりと定着出来ていればそれで良いはずで、そうであればチャレンジテストについても結果は自ずからついて来るのではないのでしょうか。

こうした批判的な意見については、相変わらずだなと思いますし、北海道の教育を変えるのは本当に難しいと感じます。

また、ネットで検索していると、チャレンジテストに対して「チャレンジテストとは全国学力調査対策のために作られ、各学校に実施を強要しているものだ。これを普段からちゃんとやっていたら入試でもいい点を取れると脅かしたいのか。だが、こんな対策問題で学力調査や入学試験をやる事が、将来の学力の何に繋がるのか。問題を少し変えればコロッと転ぶ。そんなものは試験対策であって学力ではない。」

と批判するブログを見つけました。

なかなか厳しいご意見のように見えますが、しかし、チャレンジテストに対する誤解もあるように感じます。

例えば「普段からちゃんとやっていたら入試でもいい点が取れると脅かしたいのか」とありますが、「チャレンジテストをちゃんとやっていたら入試でいい点が取れる」と単純に考えている人は、恐らくいないと思います。まして、チャレンジテストを脅しに使うというのは聞いた事ありません。

また、チャレンジテストは、普段の勉強がどの程度身に付いているかを確かめる事が目的ですから、大事なのはチャレンジテストではなく普段の教科指導の中身である事というまでもありません。

更に、ブログの主は、チャレンジテストが「将来の学力の何に繋がるのか」と疑問を呈していますが、これは全国一斉の学力調査の場合と同様、その結果を分析し、今後の授業改善等に取り組んで行けば、子ども達の学力向上に資する事は明らかだと思えます。

逆に、やりっぱなしの授業では、子ども達に必要な基礎基本の力が身に付いたか否か分かりませんし、分からなければ授業の改善も出来るはずはありません。そういう意味では、各学校、各教師の皆さんが、チャレンジテストを良く理解し、積極的に活用していく意識を持つ事が重要です。

「問題を少し変えればコロッと転ぶ。そんなものは試験対策であって学力ではない」という指摘は、その通りだと思います。ここは、私も同感です。

チャレンジテストは、高等学校の入学試験対策のために行っているものではなく、教師の皆さんの教育実践の結果の検証と捉えるべきです。教師の皆さんは、その検証作業から目を背けてはならないと思います。むしろ、子ども達に基礎基本をしっかり定着させると共に、その知識を有効に活用していく力を身に付けさせるためにも、チャレンジテストや学力調査の結果を積極的に、かつ、有効に活用して欲しいと思っています。

(塾頭：吉田 洋一)